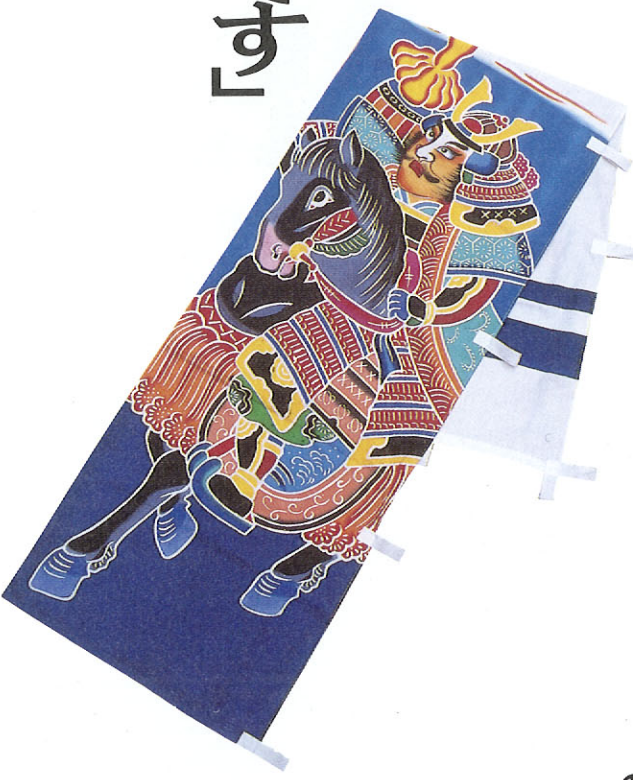


水俣の街に いまも翻る初代ののぼり。 「この仕事は死ぬまで修業です」



小形染物店二代目店主
こがたきよと
小形清人さん

一九二二年 水俣市生まれ
一九三三年 染色を手がけ始める
一九六八年 熊本県手染染色組合会長
一九九二年 大漁旗のれんで熊本県伝統的工芸品の指定を受ける

色鮮やかな大漁旗やのれんを作
つて創業七十五年になる水俣市の小
形染物店。染めて、干して、洗って、乾
かす——量産はせず一点一点を生み
出す手染めの味わいに、県内外から
の注文が絶えません。「昔は夜も字
の稽古ばしよりました」と語る小形
清人さんに、染色五十余年の職人の
技を見せてもらいました。

暑と寒さをいとわぬ筒引き

昔ながらの土間の作業場につり下げ
られた奉納旗の白い生地。小形染物店
を訪れた日、あるじの小形清人さんは
汗を滴らせながら、のぼり作りの最初
の工程に専念しているところでした。
薄く下書きされた文字の上からツツ

筒引きが終わって生地の上に砂を散
らすと、のりづけした文字の部分にだ
け砂が乗ります。砂が乾いたらハケで
生地を染色して乾かし、乾燥室で熱処
理。水槽に入れたのりを落として洗い、
再び乾かします。すると、のりづけさ
れた部分だけ染料が染み込みます。鮮や



筒引きの後に乗せる砂はキメの細かい海砂。
「川砂は目が粗くて染めるときにハケ先が切れません」

筒引き



かに染め抜かれた図柄が出来上がり。
染め物に水は欠かせませんが、
「水俣はもともと水に恵まれている
ようで、わが家でも昔からの井戸水が
役立っています」と賢市さん。
豊かな水で洗われた生地は、のぼり
や大漁旗、法被など用途に応じて縫製
されると完成です。

フリーハンドで書く 親父の文字は超一流

奉納旗の長さは約七・五尺。いまや
染色の世界でもコンピュータで文字
のサイズや間隔を割り出して型紙を取
るのが主流ですが、清人さんは目分量
のフリーハンドで仕上げていきます。
「これだけの文字が書ける職人はほ
かに知りません。ふだんは実の親子以
上に何でも言い合う仲ですが、職人と
して親父は超一流だと尊敬しています」と
賢市さん。

小形染物店は、清人さんの父親が熊
本市の丸本本店で藍染めを修業し大正
八年、現在地で創業。水俣市内では、
いまでも先代が作ったのぼりを掲げる
神社が見られます。しかし、かつては
七、八軒あった同業者も戦後は職人の
減少とともに同店一軒となり、染料も
化学染料へと変わりました。

「ウチは娘ばかりだけん、わたしの
代で終わるかと思ったりしましたが、賢
市が手伝うようになって。絵心は賢市
のほうがあったんじゃないかな」
二人だけで行う手作業だけに量産は
できず、春先の五月のぼりや、年末に
翠春分の宮のぼりや大漁旗を作るこ
ろは、「食事も立ったまま」という忙し
さが続きます。

早くも四代目が修業中。 「でも、文字だけは書いて やらんば」

「水俣ののぼりは、矢旗でも奉納旗
でも昔から大きさが特徴。大幅、ヤ
ール幅、三幅とあるうち一番大きか三
幅（幅一尺）の注文が多かったですね。こ
がんとかとは、よそじゃ売れん（笑）」
栄光丸や金刀比羅丸など、力強く書
かれた船名に、松竹梅やタイの縁起も
の絵柄がにぎやかに配された大漁旗。
一点、一点異なる手染めの出来栄に、
県内はもとより鹿児島や宮崎、長崎の
五島などから注文が相次ぎます。最近
では知人の依頼で、カナダの「すしバ
ー」ののれんを手がけたとか。

清人さんは本業の傍ら、交通安全の
標語を染め抜いたタスキやタオルなど
を地元で寄贈する活動も続けています。
賢市さんの次男の幸樹さんは中二の
とき家業を継ぐと宣言。高校卒業後、
博多で手染めとプリントを修業中です。
「じいちゃんの後継者と宣言して、こ
の仕事が」好きでしような。まあ、戻
ってきて、文字だけは当分わたしが
書いてやらんば。死ぬまで修業です
孫の話に相手を崩しながら、清人さ
んは気負わずに語り終えてくれました。



使い込まれたハケとヘラ